

2014年11月

## ACSB中小企業研究アジア協議会第二回大会参加記

三井逸友 JICSB 中小企業研究国際協議会日本委員会委員長  
(嘉悦大学大学院教授・横浜国立大学名誉教授)

### はじめに

10月27日～11月1日の間、ソウルで開催された第二回アジア中小企業研究協議会大会(2nd ACSB)に行きまして。

前回の創立大会に続くソウルでの開催で、韓国の準備委員会のご苦勞もひとかたならぬものだったと思います。キム・キチャン ACSB 会長、キム・ヨンジン事務局局長はじめ、多くの方々が連日連夜大車輪のご活躍で、その体力気力だけでも、もう敬意を表するほかありません。

今回の ACSB 大会には、日本から、私と岡室博之 JICSB 副委員長、加藤敦副委員長、高橋德行担当理事、山本聡広報担当、小竹暢隆会員の諸氏のほか、自由論題発表者として、岡室氏との共同研究者の鈴木真也氏(文科省科学技術・学術政策研究所)、五味嗣夫氏(諏訪東京理科大学)、さらに招待講演を行った末松千尋氏(京都大学)、が参加されました。

これに対し、会場を圧倒していたのは、来年の第三回 ACSB 大会開催を予定するマレーシアからのおおぜいの参加者でした。さらに、ベトナム、ミャンマーからの参加と招待演説もあり、ACSB の輪が広がってきていることを実感させました。

ICSB サイドからは、ルーベン・アスクア会長、エイマン・タラビシー専務理事が今回も終日参加され、また招待パネリストのホアン・ケッテレル(インターアメリカン開発銀行)、マチュー・ガムセール(世界銀行)、バーバラ・メイドメント(オーストラリアマーガレットリバービジネスセンター)各氏ら、アジア以外、米大陸、オセアニア、欧州などからの顔ぶれも多彩であり、国際的な場になったと申せましょう。

プレイベントとしての工場見学では、サムソン電子、ヒュンダイ自動車などを訪問、参加者からは非常におもしろかった、貴重な機会だったとの声が寄せられました。

### 第一日・政策フォーラム

10月29日開催の政策フォーラム(韓国カトリック大学聖医キャンパス盤浦校舎会議場)では、キム会長の意向がよよく反映したか、氏の提唱する「HeBEX」(ビジネスエコシステム健康度)の概念と指標をもとにした議論が展開されました。これに関し、ミャンマーのマウン・ミント産業相、タンスリ・アブダル・ラーマン・ママット ICSMEE マレーシア議長、ロバート・サン・クェライ台湾 ICSB 会長、ズン・ドンガオ(高旭東)中国清華大学教授、ジア・キャンジア ICSB シンガポール代表(南洋理工大学)、トラン・ミンタン

ベトナム貿易産業省輸出開発部長、そして私三井が予定発言者としてスピーチを行ったわけですが。

キム氏の主唱する HeBEX の議論は、実際には企業間の連携や取引関係、競争と協調、産業組織や産業構造を具体的に検討するのではなく、マクロ的な諸指標、特に創造性、生産性、事業機会という三指標を主に用い、「収益性」成果を含めてこれらの変化、相互の関係の状況を計量的に把握し、「進化」の過程を問う一方で、「現職期間ののろい」「ガラパゴス化」などの近視眼的経営の陥っているアジア各国の産業と企業の問題点を指摘するという大胆なものです。本年8月の JICSB ワークショップ（熱海）における同氏の招待講演で、その考え方と枠組みが述べられています。

これに対し、各発言者はおおむねこれらの観点・方法を支持しながら、自国の現状、国際比較等を取り上げ、それらに絡む産業政策、中小企業政策を概観し、「ビジネス生態系」の可能性を語るといった議論を展開していました。ただし、それらは「現状分析」なのか「政策論」なのか、あるいは「経営論」なのか基本的にすれ違っている観も否定できません。時間の関係で、質疑応答もありませんでしたし。

三井としては、「健全な生態系には望ましい環境がいる」、それには一つには「政策や制度環境」が重要であり、また「生態系の多様性」をにない、新しい企業家精神と事業の芽を生み出し、「バイタルペリフェラル（活力ある周辺）」を構成する中小企業、なかんずくマイクロ企業多数の存在が欠かせない、そうした意味を含め、いま世界各国の中小企業政策では中小企業一般と小企業・マイクロ企業を区別し、異なる政策方法を用いる流れが顕著で、日本も「小規模企業振興基本法」を制定しこれにならったと説明したわけです。

こうした搦め手からの問いかけは、スピーカーにも参加者にもどれだけ理解されたかは疑問とせざるを得ませんが、「中小企業協議会」の議論を外れた、単なる競争力論に終始するのであれば、なんのための政策フォーラムなのかと疑問を呈するのは、それほど場違いでもないと思はれるのですが。

ちなみに、昨年の ACSB での私の準備不足からの「失態」（現地で私の名がプログラムの「グローバル化」セッションに載っているのをようやく発見、それから泥縄で準備）の教訓から、今回は準備怠りなく、数十ページの ppt 資料のコピーを用意、会場に配布する一方で、予定の10分程度の原稿も作成し、まあまあ首尾となりました。予定原稿を読むのではなく、ppt を投影しながら逐次説明していくといった講義スタイルの方がよいはずという理解もわかりますが、非常に制約された時間内で、言いたいことを全部盛り込むというのは、私の能力を超えているので、予定原稿で行くという、こうした「うけない」スタイルもあえてやる次第です。反対に、2年前の KASBS 韓国中小企業学会大会に呼ばれていった際は、ドラフトペーパーも ppt も完全無視して、勝手なことをその場の勢いでしゃべりましたけれど。あんまりいいことじゃないと自分では考えています。

用意した ppt 資料には、各国の「中小企業とマイクロ企業」定義も載せておいたので、ベトナムのミンタン氏はこれに言及していました。

このセッションのあとには、招待講演の末松千尋氏が「キョウトスタイルマネジメント」論を展開しました、京セラ、村田、ロームなど京都から生まれた中堅・成長企業の成長戦

略の特徴、自社のつよみに資源を集中し、機敏な戦略展開をすすめ、バブル崩壊以降の困難な時代を乗り越え、「脱下請」・独自の市場を構築、大手メーカーをしのぐ収益性を確保してきたこれらの経営の特性を多面的かつ簡潔にまとめた講演は、非常に印象的かつ実践的なもので、この ACSB 大会にふさわしいものでした。もちろん、多くの中小企業が同様の経営戦略をとれるものか、基本的な問題はあり得ますが。

このあとは、「韓国セッション」としての政策討論が用意されており、相当に突っ込んだ議論が、学界、官界、実業界を交えて行われた模様ですが、海外参加者には会場であるカトリック大学聖メリー病院ツアーが用意され、その後の日程を含め、韓国学会と ACSB としての国際学会とがいささか接ぎ木的な設定になっていたことは否定できません。この病院ツアー参加者の感想としては、非常に立派で高度な設備、医療体制を整える同病院には感銘を受けたものの、外国のリッチな患者の受け入れを狙った至れり尽くせりの特別病室に対しては、100 年前にこの病院を設立し、支えてきたカトリック団体の奉仕と社会貢献の宗教的理念に対してどうなのか、という疑問の声もあったそうです。

## 大会第二日

第二日、10 月 30 日には、ソウルパレスホテル大ホールで開会式、全体会が開催されました。昨年の創立大会に比べれば小規模かつ実務的になったとはいえ、韓国政府金融戦略省ヨ・ヒュンファン副大臣を迎えての開会式とキム ACSB 会長、パスクァ ICSB 会長のオープニングスピーチ、ハン・ユンファ KSMBA 韓国中小企業庁長官のあいさつ、さらには前記のマチュー・ガムゼール氏、ホワン・ケッテレル氏、さらにマレーシア中小企業事業団のダト・ハフサ・ハシム代表取締役と続いたキーノートスピーチは、それぞれに、自国の現状と政策の意義、アジアや世界経済に果たす中小企業の可能性を詳しく論じるものでした。

午後は、これら各スピーカーとともに、ミャンマーのマウン・ミント大臣、オーストラリアのバーバラ・メイドメント氏、台湾のロバート・サン・クェライ会長が壇上にそろい、「アジアの時代における中小企業政策と各国間連携」についての円卓会議が行われました。しかし残念ながら、日本の政策当事者や中小企業団体関係者の登壇はない、誠に皮肉なくらいに「アジアの時代」から取り残されている我が国を象徴していると申したら、うがちすぎでしょうか。しかし、JICSB からの参加と貢献はそれなりのものであっても、現に行政界政界実業界などからの参加はないのですから、否定できない事実ではあります。

昨年の ACSB 設立大会には、韓国中小企業団体中央会の強い働きかけもあって、日本の北川中小企業庁長官、鶴田全国中央会会長が登壇、大いに注目をされましたが、今回は後援に韓国中央会は入らなかったこともあり、私ども学界関係者ばかりとなってしまったのです。韓国のみならず、マレーシアや台湾、シンガポール、さらにミャンマーやベトナムなど、アジア各国の諸方面のビッグネームが顔を見せる、このことを日本は無視はできません。

そのあとは各分科会となりました。6つの分科会が設定されましたが、そのうち一つは「韓国セッション」の「グローバル競争下の諸課題」であり、実質的にアジア規模の分科会は5つ、16本の発表で、国際学会としてはだいぶ小規模となったのは否定できません。第一分科会は「中小企業の国際化」で、鈴木真也氏が岡室氏との共同研究「大学発起業の国際的事業展開に向けての決定要因」を発表、第二分科会は「社会的および環境的企業家精神」、第三分科会は「グローバル化とアジアの企業家精神・中小企業へのインパクト」で、五味嗣夫氏が「再生へのエンジンとしての企業家精神 ― 諏訪産業地域の形成と発展」を発表、第四分科会は「企業家精神とベンチャー」で、高橋德行氏が「日本の女性企業家精神 ― なぜ日本での女性企業家活動は低調なのか?」、また加藤敦氏が「日本のICT技術者間での起業態度の実証研究」を各発表、第五分科会「成功する中小企業」では、山本聡氏が「トップ経営者の性格は売買関係における日本中小製造業の経営成果にどのように影響しているか?」を発表されました。16本の研究発表中で5本、約1/3が日本からの参加者と言うことは、この面では日本のプレゼンスが高かったとできるでしょう。

この多くの日程をこなしたあと、同日夕には全体会会場でガラディナーが開催されました。韓国流の豪華なメニューの数々と、乾杯の嵐の後には、女性ダンサーグループの「ガンナムスタイル」のパフォーマンスがステージで繰り広げられ、音と光の乱舞のもとで、会場は大いに盛り上がりました。

### 大会第三日

第三日、10月31日は、グローバルセッションと韓国セッションの同時開催で、KASBS大会の色彩がいつそう濃いものでした。「SSCI(社会科学引用インデックス)レベルジャーナルでどのように成果を刊行するか」、「オンラインラーニングエクセレンスのトレーニングワークショップ」の二つの国際セッションも開催されましたが、表題通りに若手研究者の啓蒙的性格のものと申せましょう。

韓国セッションの政策フォーラムを終えた全体会場で、午後5時近くから全体会と閉会式が行われました。ACSBとKASBSのベストペーパーの表彰のほか、今回新設された「ベスト企業家賞」「ベスト政策賞」の授賞も行われました。ACSBベストペーパー賞は、ブルガリアから参加し「グローバル化のもとでの中小企業の国際競争力要因の統合モデル」を第三分科会で発表したジェリュ・ウラジミール氏が受賞、遠路はるばるの参加の甲斐あって、非常に喜んでおられました。同氏は6月のダブリンICSBにも来られています。

「ベスト企業家賞」は、マレーシアのラウシウワイ(劉紹慧)氏が受賞しました。同氏はサラワクで「ミリハウジンググループ」「メリッツホテルグループ」を経営、地域の経済発展に尽くすとともに、教授・博士でもあり、諸方面に多大の貢献をされています。ご高齢で不自由な身体をおしての出席、ラウ氏の喜びようは大変なものでした。

政策賞は、特別賞が前日にマレーシア中小企業事業団のハフサ・ハシム氏に授与されましたが、本賞は韓国中小企業事業団KSMBCおよび台湾の中小企業・経済問題庁(代理で、陳教授が受賞)に与えられました。

閉会に当たっては、次回大会開催のマレーシア代表団がラウ氏を含めて大々的なプロモーションを行い、再会を心待ちにしていると強調しました。ICSB 次回大会開催の UAE からのプロモーションも行われましたが、時間の関係か、こちらのビデオ上映がカットされてしまったのは残念なところでした。

31 日夜は、ACSB 関係者、国外参加者らを招いての VIP ディナーが開催されました。昨年と同じ、首都中心ヨイドの 63 シティビルの高層中華レストラン、百里香で、女性起業家オーナーのご招待、ソウルの夜景を眼下に見おろしながらの会食です。それぞれの国のグループの紹介と乾杯など、賑やかに盛り上がりましたが、個人的には興味深かったのが、隣席となり、スピーチにもたったアン・チョニョン（安忠榮）氏の語る、韓国中小企業政策の今日の性格の話でした。経済成長を続ける一方、過度の財閥系大企業への経済力集中、賃金などでの中小企業との格差拡大、雇用状況の悪化、衰退する小規模企業などの現実に対し、政府の政策が求められていること、企業の社会的責任実行や社会的企業の促進などが重要な関わりを持っていること、同氏自身が現在、韓国パートナーシップ委員会委員長、大・小企業協力財団会長を務め、大企業の事業拡大への規制と中小企業の事業分野確保、大企業との協力推進を図っていると紹介し、韓国政府としてのスタンスを明言されていました。これは、一年前の ACSB 創立大会におけるカク・スーイル（郭秀一）ソウル大学教授（もと KASBS 会長、今回も閉会式の際にちらと再会できました）のスピーチと共通するものです。

アン氏は政府エコノミストとして多大の活躍をしてこられた一方、マレーシアやラテンアメリカでの政策立案に助言し、また日本にも滞在、出版もしている（安忠榮『現代東アジア経済論』岩波書店、2000 年）論客で、もうかなりの高齢ですが、確固とした信念をお持ちのようです。同氏とは、日本生活の思い出とともに、昨今の日韓関係などにも心よせ、意見をかわすことができました。同時にまた、日本では格差是正や中小企業の事業分野確保といった理念は 15 年前に見限られてしまっていることも指摘せねばなりません。また、アン氏のスタンスに、いまの KASBS 韓国学会の幹部の方々がどこまで共感されているのか、その辺も疑問に思えました。先にも書いたように、ACSB 開催などへの大企業の寄与貢献も、大企業と中小企業の協力関係推進、大企業の社会的責任の一環と理解されているのでしょうか。

中小企業と企業家精神への評価、その経営発展への期待は共通していても、ICSB、ACSB を担う人々の考え方には、かなりの同床異夢の側面もあるとせねばならないでしょう。

## ACSB 理事会

ACSB 理事会が 10 月 31 日朝に、会場のパレスホテルで開催されました。

キム会長以下、ACSB 副会長や理事ら、また ICSB 幹部らの参加で、日本からは岡室 ACSB 副会長（JICSB 副委員長）、高橋 ACSB 副会長、三井 JICSB 委員長が参加、加藤 JICSB 副委員長が陪席しています。

ここでの議題 1 は、今後の ACSB 大会の開催で、来年のマレーシアミリ市ののちに関し、2016 年大会は台湾を第 1 候補とするという会長の提案を了承、台湾のチェン氏は、支部として 11 月末までに回答するとしています。その後に関しては未定ですが、日本ではどうかという声に対し、後述のように三井が日本支部の現状と課題を説明しました。

議題 2 は、キム・キチャン ACSB 会長が来年 6 月に ICSB 会長に就任するに関して、後任の ACSB 会長を互選することになり、現会長の推薦により、後任の ACSB 会長には現副会長の一人であるペ・ゾンタエ（裴鐘太）氏（韓国 KAIST 教授、KASBS 現会長）が残りの 1 年の任期を務めることとなりました。

報告として、ACSB を構成する各支部より、支部事情について説明がありました。ICSB 事務局からは、各支部 100 人以上の会員という希望の線が示される一方で、JICSB に対する日本政府の協力についても言及があり、政府代表が出席する OECD の場などを通じ、ICSB の存在と役割を伝えるようにしてみたいとのことでした。三井としては、当面は日本の国内事情であることたえております。

ICSB 事務局よりは、他に以下の報告がありました。ICSB China の委員長が清華大学の Xudong Gao 教授に引き継がれる予定である。関連して、次年度 ICSB 大会が中国青島開催の予定を変更せざるを得なかった、これにからむ ICSB 中国の諸問題と事態の経過が軽視できないが、ICSB 事務局として、適切な判断と助言をしつつ、解決を待っている、SEAANZ とインドネシア代表が来られなくなった、他方で今回参加のミャンマーやベトナムでの組織づくりの展望があり、期待できる、等々です。また、ICSB 世界大会の今後の予定ないし展望として、以下の名があがりました。2015 年 ドバイ（確定）、2016 年 米国ニューヨーク市、2017 年 アルゼンチン（パスクァ現会長の母国）、2018 年 台湾、2019 年 フランスパリ市、2020 年 マレーシア、2021 年 カナダ、こうした各候補地です。これには多分に、ICSB 事務局サイドの願望も反映していると言えましようが、相当先まで見通した計画と折衝努力が図られていると申せましよう。この 7 年先までのうちに、3 つのアジアでの開催候補地の名が出ていること自体、ACSB のプレゼンスが大きなものとなっていることを物語っているとと言えます。特に、マレーシアの存在はきわめて重要でしょう。

2015 年 10 月 26～30 日に、ACSB 第三回大会がマレーシアサラワク州ミリ市で開催されます。前記のように、現地実行委員会の熱の入れようは大変なものです。アカデミックなセッション、討論の場のみならず、ビジネスマッチングなどの機会もすでに設定されています。まだ開発途上のボルネオ島サラワクへの関心を求め、各国の企業家、中小企業団体や政府機関等の関係者の参加が切望されているのです。実際に、ACSB マレーシア大会に関しては、新たな動きもあることが伝えられています。日本からも、この機会に大いに貢献できることを願ってやみません。